

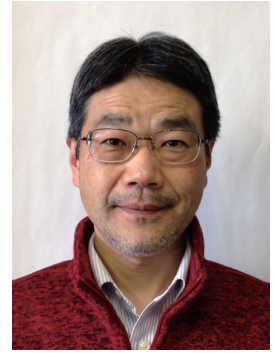
物と心の狭間で — 領域横断的な本質を求めて

広島大学大学院教育学研究科 教授

杉村伸一郎 (すぎむら しんいちろう)

Profile — 杉村伸一郎

1990年、名古屋大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。名古屋大学教育学部助手、神戸女子大学文学部助教授、広島大学大学院教育学研究科助教授を経て、2009年より現職。博士（教育心理学）。専門は発達心理学。著書は『教育・発達心理学』（共編、ミネルヴァ書房）、『実験で学ぶ発達心理学』（共編、ナカニシヤ出版）など。



あなたは、研究の神様の存在を信じますか？ 私は、今回の原稿の依頼を受けて、研究の神様の存在を確信しました。というのは、過去にも心理学を志した頃の話を書いたことがあるのですが、その時も、私の心が研究から離れそうになった時に、原稿の依頼があったからです。そして、その原稿の執筆をきっかけに、再び研究の世界に戻ることができました。きっと今回も、研究の神様が見守っていて、再起のチャンスを与えてくれたに違いない、と信じて書くことにします。

さて、前回は「私の心理学的発想の原点」というタイトルで、主に小学生の頃の思い出を書きました（杉村、2001）。当時は、長年いた母校から離れて、ようやく社会的に一人前になれた頃でした。しかし、ほとんどの大学院生が経験することだと思いますが、就職先の多くは、大学院の時に比べて、研究が行いにくい環境です。それに加えて、研究以外の仕事（以外というより、こちらのほうが圧倒的に多いのですが）山ほどあるので、研究時間がどうしても短くなってしまいがちです。少なくとも私はそうでした。

そんな時期に、自分がなぜ研究者になったのかを振り返りました。そして、変化を観察する楽しみ、見えないものが見えるように

なった時や関係を見つけた時の喜び、そういったワクワク・ドキドキをたくさん味わうためだったことを再確認しました。続いて、授業や学生指導もやりがいはあるけど、これが自分の本当にやりたかったことなんだろうか、と自問自答しました。その結果、久しぶりの実験を幼稚園で行いました。

そして現在、研究環境は恵まれているほうだと思いますが、研究に夢中になれるかといえば、そうではありません。その原因の一つに、研究全体の中で、純粋に内発的な動機に基づいた研究の割合が少なくなったことがあると思います。つまり、どちらかといえば、私の興味や関心は、すぐに役立たず、研究にもお金がかかりません。しかし、大学は、地域や社会に貢献できる研究や、多くの外部資金を獲得できる研究を求めます。そこで、大学に合わせて研究テーマを設定しているうちに、自分が本来やりたかったことから離れてしまったように思います。

前置きが長くなってしまいましたが、再び研究に夢中になれるよう、これから再び、心理学を志した頃を振り返りたいと思います。

発明と発見へのあこがれ

出ばなをくじくようですが、自分の過去を振り返って、明確に心理学を志したことはありません。ただ、幼児期から一貫して、実験

と生物が好きでした。当時のお気に入りには、小学館の（新）学習図鑑シリーズで、特に、『理科実験の図鑑』『昆虫の生態図鑑』『発明と発見の図鑑』は、50年近く経った今も大切に保存しています。この当時の思いは、杉村（2001）で書きましたので、今回は、1年前に発見した小学2年生の時の日記を、少し恥ずかしいですが、一部、紹介しようと思います。

小学2年生の時の日記は、中学校以降の日記と違い、自分で書いた記憶が全くないためか、現在の自分とは全く別人格のようです。2月17日から始まっていたのですが、その日は、「まめでんきゅうでじっけんをした」という書き出しで、後は、実験の手順と結果が書いてありました。18日は学校の授業での実験の記述、19日は、ヒューズを分解し組み立てた話、21日が紙笛の実験、22日



小さい頃に夢中になった図鑑

は懐中電灯づくり、そして、23日は「くうきロケットでじっけんをしました」と、ほとんど毎日「じっけん」でした。これを読んで、今も実験という言葉が大好きで、『実験で学ぶ発達心理学』という本を作りたくなった理由がわかりました。

実は、先ほどの期間で、たった一日、「じっけん」が出てこない日がありました。もしかすると、その日が、私の心理学の志に潜在的に大きな影響を与えていたのかもしれませんが。2月20日の日記には、「お父さんがとうきょうに学位ろん文をもっていきました。だいは『べんべつひん学しゅうのりろんにかんするじっけんてきけんきゅう』です。(中略)そのほんは10年がかりでかいてじっけんが20ある、とお父さんがおしえてくれました」と書かれています。

たまたま父も心理学の研究者で、私の好きな「じっけん」をしていたわけです。そこで、日記の最後は、「ほくも大きくなったらお父さんみたいになりたいと思いました」で締めくくられていました。

こんなふうに、小さい頃から「じっけん」が好きだったのですが、かといって研究者を目指して勉強をしたわけではありません。後年、父の著書に小学生時の保護者会で「成績はあまり良くないので、家でやる気を起こすように指導してください」と担任から言われたというのを読み、申し訳ない気持ちになったことがあります。

工学から心理学への転向

やる気が少し起きたのは、中学校に進学する前後に、『幸運な失敗』というトランジスタの誕生物語を読んだ時です。ノーベル物理学賞を受けたショックレーという研究者の発想にあこがれました。

常にものの本質を見抜こうとするのです。例えば、増幅という作用は、簡単な二つの作用の組み合わせに過ぎず、それさえ備えたものであれば、どんな構造であろうと増幅作用を示すはずである、と考えるのです。そして、真空管ではなく結晶で増幅作用をつくり出すという夢を抱くのです。

話がそれますが、後年ピアジェを知った時、ショックレーに似た部分があると思いました。普通の心理学者は、保存という概念を使う時、幼児期の発達の文脈だけしか考えません。しかしピアジェは、科学的水準も含め、認識すべてにおいて保存を想定していたのです。ですから、彼の頭の中では、物理学における運動量保存の法則や化学における質量保存の法則と同様、人間の認識においても、何らかの保存の法則があり、その発生を明らかにする必要があったのです。

さて、次にやる気が少し高まったのは、中学2年生の時でした。「人間というのは最もよくできた生物である」という生物の先生の言葉を聞いた時です。何かが閃きました。その時は専門用語を知らなかったのですが、内容的には、生物のすぐれた機能を工学的に応用するバイオニクスや人工知能の研究に近いことを将来やってみたいと思った記憶があります。

高校は理系のクラスに進学し、最初の大学受験では、バイオニクスを研究するために大阪大学の基礎工学部を受けました。ところが落ちてしまい、予備校に入る時、急に文系クラスに変更しました。どうしてそのような判断をしたのか、不合格のショックのせいとか全く記憶がないのですが、学力や相性を考慮したのだと思います。

結果的に、これで心理学の道に入ったのですが、自分としては、

心理学という学問全般には興味がなく、人工知能の研究のために人間の認知機能を解明したかったのです。そのために、認知心理学の授業や実験はとても面白く真剣に取り組んだのですが、他の心理学の授業はあまり興味ももてず、認知科学全般を自分で学びました。

当時、学部の3年生から大学院の1年生の間に取り組んでいたのは、視覚イメージの性質や機能の解明で、実際に見る知覚と見ないで自ら生成したイメージの処理の違いを検討していました。なぜ、イメージかという点、3年生の時に読んだBrooks (1968)の選択的干渉の実験などが、とても美しく思えたからです。

しかし、大学院の1年目の後半に、突然、研究の対象を成人から幼児に変えることになります。ピアジェに出会ってしまったからです。イメージの起源は知覚ではなく模倣である、というピアジェの説は、知覚の延長としてのイメージという私の考えをぶっ飛ばしました。しかし、模倣の内面化という説明が腑に落ちませんでした。そこで、空間認知の発達の研究の道に入ったのです。そして未だに、ピアジェの手のひらから飛び出そうと努力をしています(例えば、杉村, 2009)。

文献

- Brooks, L. R. (1968) Spatial and verbal components of the act of recall. *Canadian Journal of Psychology*, 22, 349-368.
- 杉村伸一郎 (2001) 「私の心理学的発想の原点」 梶田正巳 (監修) 石田勢津子・大野木裕明・杉村伸一郎 (編) 『学ぶ心理学, 生かす心理学』 ナカニシヤ出版 pp.86-91.
- 杉村伸一郎 (2009) 臨床法による心的イメージの発達の検討. 『心理科学』 30, 44-63.